

# 「資料紹介」

図書館の近着資料のなかから数点を選んで紹介します。

吉田昌夫著 東アフリカ社会  
経済論——タンザニアを中心  
として—— 東京 古今書院  
1997年 367p.



本書は、著者がこれまで行なってきたタンザニアの社会経済に関する研究成果を、テーマごとに再編成したものである。その意味で、著者のタンザニア研究の集大成とも呼ぶべきものであろう。収められている研究テーマは、エスニシティ問題、土地保有制度、農産物流通、小農経営構造、農村開発政策、都市社会と国家セクターなど多岐にわたっている。これらの中でも特に、実態調査に基づく農村社会についての研究が、この分野のパイオニアである著者の本領が最も発揮されていて読み応えがある。

本書を通して貫かれている著者の研究アプローチは、農村社会・都市社会と、その双方に影響を与えてきた外部世界（国家、国際社会）との接合点に注目するということである。そのようないわばマクロとミクロの相互関係に注目しながら、著者は、タンザニアにおける「国家による土着社会の包摂」の過程を明らかにしようとする。すなわち、タンザニア国内の「内発的な社会経済発展の契機が、外部からの国際政治経済的な圧力あるいは動因によって、破壊ではなくどちらかという緩和やかに包摂され」る過程が、実証的な手法によって描き出されていくのである。

著者が東アフリカ地域に滞在して研究を開始した1960年代に比べると、現在のこの地域は格段に身近な存在となってきた。その結果、タンザニアの問題に携わる実務者・研究者も、人数・分野ともかなりの数に上っている。タンザニアおよび東アフリカの問題を広い視野から扱っている本書は、そのようなさまざまな分野の人々に有用な情報を提供してくれる。

(高根 務)

Jun Morikawa, Japan and  
Africa : Big Business and  
Diplomacy, London : Hurst  
and Company, 1997, 289p.



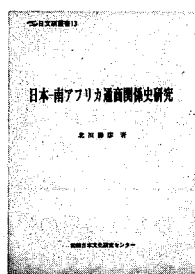
本書は、日本アフリカ学会研究奨励賞第1回受賞作『南アフリカと日本——関係の歴史・構造・課題——』（同文館 1988年）を土台としながらも、対象をサブサハラ・アフリカ全体に拡大し、時期も1993年まで延ばして、大幅に書き改められた。

著者は日本のアフリカ外交を白人アフリカ外交と黒人アフリカ外交の二元主義、冷戦下での西側陣営との協調、重点国主義、官民一体主義、宣伝外交として捉え（第2章）、第3章でその具体的展開を分析している。ここで著者は独立前の日・アフリカ関係は無傷という「神話」を破壊している。続く第4章で政策決定主体として自由民主党、官僚、財界をあげ、特に経団連のアフリカ委員会、外務省の外郭組織であるアフリカ協会、南部アフリカ貿易懇談会の果たした役割を詳細に追っている。第5章は南アのISCOR拡張計画やセンサルダーニャ湾開発計画を日本が鉄鉱石の長期買い付け契約で支えた実態を明らかにしている。第6章は日本の対アフリカ外交にある人種主義に対し、日本の反アパルトヘイト運動がいかに戦ってきたかを分析し、第7章は冷戦終結後の日本の対アフリカ政策が基本的には変わらず、その間隙を青年海外協力隊やNGOが埋めようとしていると捉えている。そして展望として1994年4月の南アの民主化後、日本は南ア中心の対アフリカ外交に転じたとしている。

本書は日本人による英文で書かれた初めての本格的な日本の対アフリカ政策についての分析と言ってよい。使われた資料も公式の外交書書や貿易統計だけではなく、対アフリカ外交に関与するさまざまな組織のパンフレットや定期刊行物を丹念に渉猟している。この意味で今後日本の対アフリカ政策を研究しようとする外国人にとって必読の書となろう。

(林 晃史)

北川勝彦著 日本—南アフリカ通商関係史研究 日文研叢書13 京都 国際日本文化研究センター 1997年 173p.



本書は1980年代半ば以降、日本の経済史研究に生じたパラダイム・シフトをふまえつつ、従来の歴史研究の枠組を越えた新しい視点から日本と南アフリカの通商関係を解釈しようと試みた筆者の論稿の集成である。

両国の結合を支え、その構造や形態を左右したのが、実は国際関係から最も遠い存在の人々であったという逆説。さらに双方で生み出される商品とその複合体に体现された人々の生活やライフスタイル。こうしたものを筆者は解釈し、総体として描き出そうとした。

戦前期の『領事報告』、戦後期については日本貿易振興会の『通商弘報』を主たる資料として、経済関係とその発展という観点から跡づけられた本文の記述は緻密で、かつ手堅い。

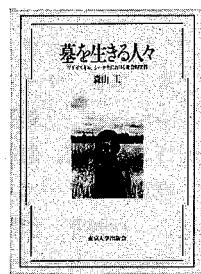
戦前期を扱った第1部は五つの章から成る。ここでは経済的背景の概観にはじまり、経済事情調査を分析、貿易関係とこれに関わった日本企業について瞥見し、1930年代「世界恐慌期」の通商関係をめぐる「日阿取極」、 「南ア羊毛購入問題」を考察している。

続く第2部は全4章で、第二次大戦後から1980年代までを扱う。やはり経済的背景にはじまり貿易関係を概観するが、残りの二つの章では対南ア経済制裁からマンデラ政権誕生に至る「新展開」、そして新生南アとの関係における「新潮流」が検討されている。

戦前期と戦後期それぞれに関する二つの付論をはさんで、結びでは日本の対外行動を規定する「準拠社会ないし国家」という視点から各国・地域との関係が見直されている。対南ア関係の準拠点が一貫していた戦前期には「経済的リアリティ」と「政治的レトリック」は一致していたが、冷戦後の今日は準拠点が定まらず、両者の矛盾としての危機が生じかねないと言う。日本の対南ア政策は重大な岐路に立っているというのが筆者のメッセージである。

(望月克哉)

森山 工著 墓を生きる人々——マダガスカル、シハナカにおける社会的実践—— 東京 東京大学出版会 1996年 iv+308p.



本書は、著者がマダガスカルにおいて3年にわたり実施してきたフィールドワークの集大成である。そのテーマは、シハナカの人々の墓をめぐる社会的実践である。シハナカにおいては、個人は複数の墓に葬られ得るが、実際にはあるひとつの墓に葬られることになる。ではその決定はどのようになされるのか。著者は、この問いに答えるため、婚姻、禁忌の継承、土地所有、居住地、墓の管理集団、個人の情緒的価値づけ、記憶などを順次取り上げ、その関連を問いつめていく。なかでも、ハイデガーの「解釈学的状況」に拠っての民族論への問題提起(序論)や、死者に対する新しい態度が文字や写真を媒介にして萌芽しているとの指摘(終章)は非常に刺激的である。

議論の展開にもまして注目されるのは、文体である。「わたし」がいかなる質問を出したか。それにシハナカの人々がどう答えたか。「わたし」はそれをどう解釈したか。そう解釈するにあたって「わたし」はいかなる情報を持っていたか……。全編を通して、「わたし」の語りであることを強く意識させるスタイルになっている。「一般と個別とのあいだを経巡る絶えざる解釈の循環の営みに、果たしてわたしは『正しい仕方にしたがって』入りこむことができたのだろうか」(291ページ)と著者は自問しているが、採用された文体はこの問いに答えるための試みであり、民族誌のあり方に対する著者の端的な意見表明であろう。

エピグラフにおいて指摘されたように、民族誌家が「小説家の流儀」にのっとらざるをえないとするなら、読み手もまた、本書を、「わたし」を主人公とする小説として読むべきであろうか。それとも、小説と了解するにせよ民族誌と了解するにせよ、読みの経験そのものの質は変わらないと考えるべきなのだろうか。文章を書く者としては、できれば避けて通りたい思考の深みをのぞかされた思いである。

(佐藤 章)

ケン・サロ=ウィワ著 福島  
富士男訳 ナイジェリアの獄  
中から——「処刑」されたオ  
ゴニ作家、最後の手記——  
東京 スリーエーネットワー  
ク 1996年 315p.



ケン・サロ=ウィワはオゴニの一員であることを誇り、オゴニ生存運動(MOSOP)のスポークスマンとしてオゴニの声を代弁したナイジェリアの作家であった。1993年6月から7月にかけて彼は約1カ月間拘留されたが、このときの話を軸に、彼が文字どおり命を懸けて取り組んだ「オゴニ問題」について語ったものが本書である。

サロ=ウィワの主張は次のようなものだった。オゴニの住むニジェール河デルタは原油を産出し、ナイジェリアの経済を支えている。しかし、ナイジェリア連邦政府と国際石油資本が結託してオゴニランドがもたらす莫大な富を貪る一方で、当のオゴニには何の見返りもない。それどころか、原油採掘による環境破壊と多数民族による政治的周辺化によって、オゴニは存亡の危機に立たされている。オゴニが生き延びるためには政治的自立が不可欠であり、これ以上の環境破壊を食い止めるのと同時に、経済的自決を含めた自治を認めるよう、連邦政府に要求する……。

オゴニは人口1億を優に超すナイジェリアのなかでわずか50万人を占めるにすぎない。そのような少数民族がガリバーとわたりあうために、サロ=ウィワはメディアを巧みに利用し、「環境」「少数民族」といった 이슈に敏感な国際社会を味方につけた。出版人、またテレビ・プロデューサーとしての経験から学びとった彼の戦略の成果である。グリーンピースは汚染されたオゴニの大地を撮影し、アムネスティ・インターナショナルは「良心の囚人」としてサロ=ウィワらを支援した。

本書もまた、彼のしたたかなメディア戦略の一環だったとも言えるだろう。しかし、脱稿後サロ=ウィワは再び逮捕され、1995年11月10日、他の7名とともに処刑されることになる。遺稿となった本書が出版されたのはその直後であった。

(牧野久美子)

エマニュエル・ドンガラ著  
高野秀行訳 世界が生まれた  
朝に 東京 小学館 1996年  
287p.



ひとりの男の生涯の物語。母  
とふたりきりバナナ畑で生まれ

た時の特異な状況と、特別な能力と偉大な祖先、持ち前の反抗心から、数奇な運命をたどる、緑色の眼をしたマングクは、もとのバナナ畑にたどり着き、生を終える。彼だけではなく、同時代のアフリカ人の人生は同じように時代の荒波にもまれていた。

また、アフリカ歴史の追体験。しかも小説の自由さで、純粹にアフリカ人の眼からみた歴史。太古から伝統社会、植民地化、第二次大戦、解放闘争、独立、政変が描かれる。

この二つの要素が2本の縦糸のようによられ、重なって展開するテクニクの独創性。訳者あとがきがいのように、「ローカル性と普遍性を実にうまく利用している。最も顕著な例は、原始共産制から貨幣経済の導入、19世紀型の帝国主義、そして現在の民主化問題を問う時代まで、言ってみれば人類が何千年もかけて昇ってきた文明の諸階段を、一人の人間が一生のうちに全部体験してしまうという設定である。こんなことはアフリカのコンゴを舞台にしないかぎり不可能な話だ」。

時間的には太古から未来へ、空間的には村から宇宙への拡がりとともに、精神世界では、主人公の変貌につれて、西洋科学と伝統的アフリカの霊知を調和させようとも試みる。

緻密な頭腦的な構成と対照的に、表現は豊かな感性にあふれている。アフリカのイメージとスピリットの美しい万華鏡をみるようだ。たっぷり自然に浸って育った人に可能な巧まざる詩的表現が多くユーモアを感じる。テンポの速い、歯切れのいい文章で、訳文はこれが翻訳であることを忘れさせる力をもっている。

著者は1941年コンゴ生まれ。アメリカ留学で物理学を学び、現在ブラザビル大学物理学教授。弟の日本留学中数回日本を訪問、本作品も日本で書き上げたという。

(丹埜靖子)